



TITLE:

北米旅行記(3)

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 北米旅行記(3). 天界 1933, 14(152): 72-76

ISSUE DATE:

1933-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165445>

RIGHT:

## 北 米 旅 行 記 (3)

## 山 本 一 清

( 13 )

暑いシカゴにも少々あきたので、自分は六月29日から暫く東部へ旅立つこととし、同日午前9時15分、黒カバン一つを携へたまい、イリノイ中央停車場から出發、ミシガン・セントラル線により、デトロイトに向ふ。此の道は、遠くボストンまでも、10年前に兩三度通過した道で、それに窓外の景も餘り珍らしくない平凡境である。

午後2時30分、大學町アンナボア市に着。舊知の道をたどつて、大學天文臺を訪れた。以前の時に比べて、天文臺の附近に大きい病院等が建ち並んで、いかにも觀測のためには妨げらしい。あだかも、臺長 H. D. Curtis 博士に面會。それから Rufus 教授に會ひたいと願つたところ、Rufus 氏は目下郊外の別莊に避暑し、そこへ昨日からワシントン議院圖書館の Brash 博士も來てゐる由を聞いたので、大に喜び、Curtis 氏の車で、美しい湖畔の Rufus 氏宅まで連れられた。

Rufus 氏夫妻は十數年前、永く朝鮮京城に宣教してゐられた由で、東洋趣味の素養があり、現に此の日も、夫人は日本服をまとい、室の片隅には美しい女下駄が置いてあり、又、岐阜提灯なども天井からつるしてゐられたには一驚した。主人 Rufus 氏も、先客 Brash 氏も、共に理學史の研究家で、去る六月22日のシカゴの天文學會席上では、此の二人と自分と、三人共に天文學史に關する論文を讀んだ(「天界」第151號第35頁)ので、其れ以來、特別な親しさを感じた。話しがはづんで、遂に Curtiss 臺長も吾々も皆一しよに夕食を饗せられ、日没が近づいたので、再會を約しつゝ、又、Curtis 氏の車に乗せられて、アンナボア停車場に引き返し、午後7時08分の東行列車に乗つた。デトロイトには午後9時35分に着。此所では別に用事も無いので、驛前の Hotel Roosevelt に泊つた。

因みに、このアンナボアの天文臺は、名を“Detroit Observatory”と呼び、

ミシガン大學附屬であつて、1852年に創立され、Brünnow や Watson 等の學者を昔し輩出した所である。設備は15糎(6吋)のピストル・マルチン作の子午環、30cm(12吋)の屈折機が古くからあるが、近年96cm(37 $\frac{1}{2}$ 吋)の反射鏡によつて恒星スペクトルの研究を、臺長や McLaughlin 博士がやつてゐる。近頃、天文臺附近の街路が發展して照明が増し、夜の觀測が困難になつたので、いよいよ郊外に移轉するに決し、西北方 12哩の地點を選び、そこに口径 213cm(84吋)の大反射鏡を据え付ける計畫であるといふ。

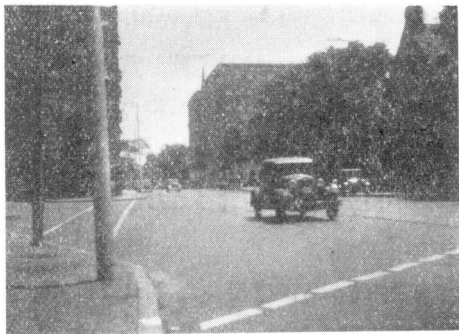
此の天文臺は二つの出張所を有つてゐる。一は、前臺長 Hussey 博士の熱心により、南阿のブルームフオンタインに1925年以來建てられたもので、口径 66cm(26吋)の眼視屈折機を据えて、南天の二重星を測定してゐる。主任は Rossiter 博士である。

今一つの出張所は、アンナボア市から北方へ25哩ばかり、Pontiac 村に近い Angelus 湖畔に、McMath 氏等の特志寄附によつて1931年に建てられたもので(「天界」第130號第53頁に記した)、専ら活動寫眞術を天文觀測に應用する方法を研究してゐる特種な天文臺である。

( 14 )

六月30日朝4時、ホテルの室内で、ふと眼がさめて見ると、烟が室内室外に漲つてゐるのに驚き、すぐはね起きて、帳場まで下りた所、第4階の一室から失火したことがわかり、消防手が早くもやつて來てゐるのに安心した。しかし、まもなく夜もあけたので、眠ることも出來ず、食事をすまし、午前8時35分の東行列車に乗つた。

汽車は一旦カナダに入り、午後2時頃、有名なナイヤガラの瀑布附近で5分停車、それから又、米國へ入つて走り続け、バ



ケンブリヂ市のコンマング・ホテル

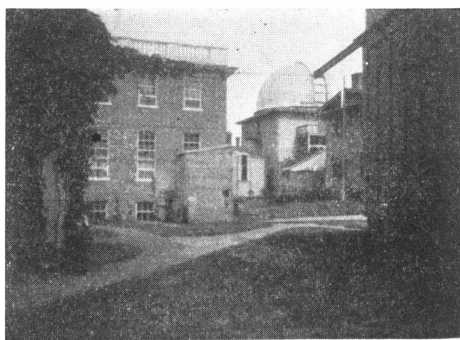
フファロ、ロチエスタ、サイラキウス等の町々を経て、午後8時38分オルバニに着、YMCA を訪ねて、宿泊した。

翌くれば七月一日(土曜)。誠に都合よく、ボストン行きの週末割引列車が出来ることを知つたので、奮發して午前6時0分發の Boston & Albany 鐵道列車に乗つた。

途中、曾遊の記憶をたどり、落ち付いた New England の景を楽しみつい、午前11時30分、ボストンの南停車場に着。あらかじめ電報が打つてあるので、着後、まもなく地下鐵でケンブリヂへ行き、ハーバード大學の Widener 圖書館に G. Sarton 博士を訪れたが、僅かな時刻の行き違ひで、同氏は歸宅された後だつたので、止むなく、プログラムを変更し、大學天文臺を訪れた。途中、Berkeley 街の、かつて借家してゐたあたりを通つて見たら、元の家は無くなつて、Commander Hotel といふ大ホテルが建つてゐた。

( 15 )

このハーバードの天文臺は1923年十一月から約10ヶ月間滞在研究した所なので、一木一草も皆思ひ出である。なじみの Concord Street の小門から入り、A館の入口で、たまたま Nantucket から來合せた Miss Harwood に會ひ、同嬢に案内されて、新舊の建物を隈なく見巡つた。Leon Campbell 氏を始め、多くの舊知に會ひ、感慨無量である。Campbell 氏と小一時間ほど話したが、白鳥座 SS 星の永年にわたる光度曲線の研究など未發表の珍しい結果を見せられた。氏は我が日本から送られる下保、神田、古畑、金森諸氏の變星觀測を賞揚せられたが、只、此等の報告が毎月一回規則正しく送り來れないのを残念だと言つてゐられた。



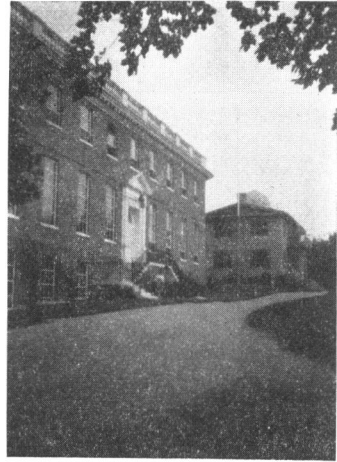
ハーバード大學天文臺

午後4時から、臺長夫人 Mrs. Shapley は、自分のために、官舎で觀迎の御茶の會を開かれた。(残念にも、臺長 Shapley 博士は避暑旅行中で、不在だつた。) 此の席で、Miss Cannon, Miss Maury, Dr. Fisher, Dr. Menzel, Dr. Whipple 等の人々に會つた。室内はなかなか暑くて、汗ダクだつたが、午後5

時半から、Whipple 氏の好意により、其の車に乗せられて、天文臺の新出張所である Oakridge 観測所を參觀した。

Oakridge は Cambridge 市から西北へ約25マイル、コンコルド市の向ふの Harvard 村の雑木林の茂みの中で、漸く昨年土地を拓いたばかり、未だ150cm(60吋)の大反射鏡はピツバグの Fecker 會社で組み立て中で、此の出張所には来てゐないが、60cm(24吋)の寫眞機や、其の他の二三の望遠鏡は首尾よく据付けられて、既に觀測を開始してゐた。事務室や、休養室舎、クラブなど、意外に行き届いた設備である。

午後7時30分、Oakridge からケンブリヂへ歸り、Whipple 夫妻と共に、自分は Menzel 夫妻の宅で晚餐を供せられ、談笑の後、南停車場に近い Hotel に泊つた。



新しいD館

( 16 )

翌七月2日の朝10時、ケンブリヂ市 Channing Place に G. Sarton 博士を訪れた。同博士は理學史の大家で、機關誌 ISIS の主幹である。十年來の友で、論文の交換など互にやつてゐる間柄である。久しぶりに會つたので、いろいろ積る話をなし、自分が今年シカゴで發表した論文の要項を見せたり、書齋を見せて貰つたりした。同氏は目下アラビヤ語を勉強中で、近くアラビヤの學術史を研究せられるのだといふ。

サートン氏の邸で話してゐるうち、ハーバード大學の數學教授 G. Birkhoff 博士がわざわざ自分を迎えに来てくれたので、正午前に、サ邸を辭し、連れられて、先づ大學のカムバスの内外、十年來に新裝新築された大小建築などを見、それから大學クラブ Faculty House に案内され、食堂で、博士の義子 Paine 氏等と共に午食を饗せられ、2時まで雜談した。バークホフ教授は1923年來の友で、1928年には京都へ來られたこともあり(天界第85號第186頁)、今夏又シカゴで會つたので、特に親しみ深い。

午後2時45分、バルコフ教授に見送られ、ボストン北停車場から出発し、同3時14分に Salem 着。十年前 Morse 博士を訪問した(天界第44號第329頁)ことなど思ひうかべながら、Ocean Terrace に Adams 夫妻を訪ねた。日曜の午後なので、誠にノンビリとして、話は盡きない。日本の話、米國の話、日食の話、平和運動の話……

夕食を三人きりで頂いて、見送られ、午後8時39分發の列車で、ボストンへ歸つたが、オルバニへ出發するまで、少しの時間があるので、大急ぎで、ケンブリヂ市 Follen Street の N. H. Black 邸を見舞つた。しかし、時刻が餘り遅いので、バジャマ姿の主人博士に一言の挨拶を残したのみで、直ぐボストン南停車場にかけつけた。

午後10時15分の終列車で、割引切符の有効な間に、一路オルバニへ。

(つづく)

## 花山の此の頃

大毎社と協力して花山天文臺と本會とは十月末から 流星觀測の全國的計畫を立て、十一月11日からプロの實行期に入りましたが、十月末頃、早くも古畑君の獅子座流星發見あり、火球も二つ三つ現はれて、急に多忙となりました。十一月11日からは、全國各地の觀測班が競争的に豊富な觀測報告を送つて下さるので「流星觀測本部」ではてんてこ舞ひです。御かげで、思ひがけない地方に多くの天文ファンが増しました。本誌一月號は流星の特輯號です。

急報も、プレテンも、どしどし増刊され、花山の編輯部も大多忙です。——急報は今後全く東亞天文協會の手を離れ、専ら天文臺のみで取り扱はれることになりました。そして、來年初からは實費料金も變ります。2 錢の切手を貼つた封筒(あて名を表記したもの)に、一枚 1 錢の割合で紙代を拂ひ込んで下さつた人だけに發送することとなります。各自御注意下さい。

九月10日から山本、稻葉、高城三氏は花山の國際經度觀測のため、毎夕毎曉奮闘してゐられます。終るのは十二月15日ですが、それまでは大馬力で、90ミリの子午儀は、百パーセントの能率を擧げてゐます。此の大事業の副産物として、子午線館内外は言ふまでもなく、無線室も、時計室も、電池室も、高壓低壓の電線系統も、皆見ちがへるやうに改良されました。

來年一月1日からは、協會の事務室も全く天文臺へ移ります。